1　小論文とは何か

■小論文は「意見文」だ

小論文という言葉が広まっている。だが、そのわりに多くの人が、小論文を一部の大学受験にしか関係のないものと思っているのではなかろうか。

私は、小論文というものを、これから多くの人に書いてほしいと考えている。「小論文」と呼ぶから難しそうに聞こえるが、要するに、小論文というのは「意見文」だ。仕事に就いた後、大学に入った後、レポート、報告書、企画書という形で書かされる文章は、基本的に小論文の変形なのだ。そして、新聞の投書欄に出る投書、インターネット上での主張。あれも立派な小論文だ。

要するに、大人になってから人前に提出するために書く（あるいは、書かされる）文章は、役所に出す書類を除けば、そのほとんどは、小論文なのだ。

誰しも、政治や経済、教育、人生について、現代社会について、現代の流行について、意見を持つ。なぜ、そんなものが流行するのかを考えてみる。流行を否定したくなる。時には肩を持ちたくなる。それを書くのが小論文だ。つまり、自分の意見を語り、背景にある状況を考える、それが小論文と言っていいだろう。

今や小論文の花盛りと言って間違いない。難関かどうかを問わず、国立・私立のほとんどの大学・短大で小論文試験が実施されている。慶応大学環境情報学部や総合政策学部など、小論文と、ほかに一科目だけで合否が決まる難関大学も少なくない。それどころか、推薦入試や社会人入試では、小論文が主役だ。小論文だけが入試科目というところのほうが、むしろ多数派だろう。

いや、大学入試だけでない。公務員試験でも入社試験でも転職試験でも、そしてこのごろは高校入試でも、小論文は出題されている。ほとんどの都道府県の公立校の国語の問題に「意見文」と呼ばれる一五〇字から三〇〇字程度の短文問題が含まれるが、これなど、小型の小論文と言っていいだろう。

要するに、今では、小論文さえ得意にしておけば、高校入試がぐっとラクになり、難関高校・大学にも合格でき、入社試験の内定も得られ、国家試験の合格も勝ち取り、社会に出てからも文章を自由に書けて、仕事をてきぱきとこなせ、人望を得ることもできるとさえ言えそうなのだ。

ところが、そのわりに、小論文とは何かが理解されていないのではなかろうか。多くの人が、小論文とは何なのか、正体をつかめずにいる。高校までの授業には小論文という科目はない。

そもそも小論文という試験科目が広まったのも最近のことだ。とりわけ、三五歳以上の方で、小論文の勉強をしたことのある人は稀だ。そして、いつのまにか、小論文を敬遠してしまっているようなのだ。

■小論文は恐れるに足りない

多くの人が小論文を敬遠する理由、それは小論文は作文を難しくしたものと思っているところにあると言えそうだ。だから、「子どものころ作文が苦手だったから、小論文は無理だろう」とか、「作文が得意だったから、小論文やレポートもなんとかなるだろう」と考えてしまう。そして、「小論文はなかなか力がつかない」「勉強のしようがない」といった迷信が広まる。少なくとも、多くの人が、小論文というものを自分とは縁のない、受験生だけのものと考えてしまう。

しかし、そもそも、大学入試に小論文が課され、高校入試の国語の問題にも小型の小論文というべき「意見文」が取り入れられているということは、文部省をはじめとする社会全体が、小論文がこれからの社会にとって必要不可欠なものだということを認めている証拠だろう。

実を言うと、小論文は「作文」より、よほどやさしい。

作文にはある程度のセンスが必要だ。少なくとも、書くことが好きにならないと、作文はこなせない。一朝一夕には作文の力はつかない。だから、作文はなかなか上手にはならない。だが、小論文は違う。小論文にいわゆる「文章力」は必要ない。表現に凝る必要もない。しゃれた言い回しをする必要もない。比喩もいらない。生き生きと描写する必要もない。ただ、的確に物事を判断し、その根拠を説明すれば、それでいい。

だから、文法的に正しい日本語の書ける人なら、論理的に書く練習をして、必要な知識を増やせば、すぐに小論文は書けるようになる。私の経験から言うと、人によっては、数回書いてみるだけで、小論文らしくなる。あとは、必要な知識を身につけるだけで、十分に優れた小論文やレポートが書けるようになる。少なくとも、これほど急速に力のつくものはほかにはないと断言できる。

むしろ、「作文が得意だった」という人に限って、妙に表現に凝ったり、意味もなく難しい言葉を使ったりして、いつまでも小論文やレポートが書けるようにならない傾向がある。そして、作文の苦手だった人、特に理系の人で、作文など書いたことがないという人が、意外に急速に力をつけたりする。

要するに、一言で言えば、小論文は恐れるに足りない、誰でも少し訓練すれば書けるようになるものなのだ。

そこで、大学入試や企業の採用試験のためだけでなく、大学や企業で求められるレポートや企画書、報告書、新聞の投書などを存分に書けるようにするためにも、まずは制限字数の少ない小論文で論理的な文章の書き方を練習することを勧める。そして、徐々に字数を増やし、内容も専門性を高めていくのが効率的だ。そんなわけで、これからしばらくの間、制限字数一〇〇〇字程度の小論文の書き方を中心に説明することにする。

■イエス・ノーを答える文章

では、作文と小論文は具体的にどこが違うのだろう。よく聞かれることだ。

一般に言われているのは、作文というのは、自分の感受性をアピールし、文体に工夫を凝らし、読む者の心を惹きつける文章だということだ。そこには主観的な感想や直感的な判断が含まれる。それに対して、小論文やレポートというのは、読んで字のごとく、何かを論じる小文のことだ。感受性を自己演出するのではない。むしろ、知性、鋭さ、てきぱきとした論理性をアピールする。そして、論理的、客観的に社会問題について、分析、判断し、その裏づけを行う。

もちろん、このような説明に間違いはない。が、もっとわかりやすい作文と小論文の違いがある。

小論文というのは、作文と違って、ある問題に対してイエスかノーかを答えるものなのだ。

小論文とは、何かを論じる文章のことだ。広辞苑で「論ずる」という項目を引くと、最初の語義として「事理を説明する。また、物事の是非をただす」とある。「物事の是非をただす」というのは、言うまでもなく、ある事柄についてイエスかノーかを明らかにすることだ。したがって、ある問題を見つけ、それに関してイエスかノーかを答えれば、それで論になる。突き詰めて言えば、論文と名のつくものは、小論文でも大論文でも、論じるものである限り、扱っている問題に対してイエスかノーかを答えている。

レポートや報告書、意見書と呼ばれるものも基本的に違いはない。問題点を見つけ、それについての問題点を指摘し、その上で意見を言うことが求められている。意見というのは、ある事柄が正しいか、好ましいか、どんな対策が可能か、あるいは不可能かといった、イエスかノーかを考えるものなのだ。

つまり、どんな問題が出されても、イエス・ノーを問う問題提起を自分で作って、それについて論じれば小論文やレポートになる。たとえば、小論文試験や大学のレポートで「クローン技術について」という問題が出された場合、それについて、様々のデータを示しただけでは、単なる「解説」であり、単なる「資料の引き写し」でしかない。「クローン技術は人類の未来にとって有益か」「クローン人間を作ることは許されるか」などのテーマを設定して、問題点

を考慮した上で、それについて判断すれば、小論文やレポートになるのだ。

「ゆとり教育」についての意見が求められたとしても、それがどのような経緯で出現したのか、その功罪は何かを検証しながら、最終的には、「ゆとり教育は好ましいのか」を判断する必要がある。それを示さないことには、論にもレポートにもならない。

課題となる文章やグラフなどの資料についての意見が問われる受験の小論文問題も、大学や企業で課される一冊の本や現実の状況についてのレポートも基本的には変わらない。これらの資料も必ず何かを主張している。その文章のテーマや指摘が正しいかどうかを判断するわけだ。一冊の本がレポートに課された場合、その全体を扱うのは難しいので、その場合は、いくつかの問題点のうち一つを選んで、その是非を論じる。グラフなどの場合も、そのグラフの示す状況は好ましいかを問題提起して論じればいい。いずれにしても、イエス・ノーを答えるわけだ。

企業で提出を求められる企画書の類も同じだ。これも、ある活動について、どんなマイナス面があるかを検証し、その対応策を考えながら、その活動の是非を判断する文章なのだ。

もちろん、長文のレポートや大学の卒業論文、大学院の修士論文など、長い文章が求められるとき、一つの問題提起だけでは不足だ。だが、その場合も、小論文の組み合わせと考えればよい。一つ一つの章や節で、ある問題についてイエスかノーかを検証して、全体像を明確にしていくわけだ。

たとえば、「わが社の製品の伸び悩み」についてレポートが求められた場合、大きな問題提起として、「伸び悩みを解決できるか」を提示すると書きやすいだろう。そして、いくつかの節を設けて、それぞれの節で「伸び悩みは一時的か」「伸び悩みの原因はX社の製品か」「伸び悩みは製品開発の失敗か」「伸び悩みは広告の不足か」など、考えられる問題についてそれぞれイエス・ノーを明確にするわけだ。そうすることで、長文の論文もできあがる。

いずれにしても、一つのまとまりについては一つのイエス・ノーの問題提起をして、それについて判断をするわけだ。そうすることで、論点を定められる。一つのことを深く論じることができる。短い字数であれこれ書くと、論点が定まらず、まとまりのない文章になってしまう。

そして、それだけでなく、「今度は何を書こうかな」などと考えるまでもなく、毎回、どんな問題が出されようと、問題点を見つけ、それに対してイエス・ノーを判断すればよい。そうすれば、いつも同じパターンで書ける。

ただし、もちろん、どんな問題提起でもよいわけではない。うまい問題提起ができないと論を成り立たせることができない。問題提起に失敗すると、全体が無意味な文章になってしまう。

小論文にせよ、レポートにせよ、もっとも大事なのは、問題提起が賛否両論の存在するものでなければならないということだ。たとえば、小論文やレポートで「コンピュータと生活」や「売り上げ増加」という題を出されて、「コンピュータは生活のなかで使われているか」「売り上げを増加するべきか」といったイエスに決まった問題提起をしても意味がない。これでは、「コンピュータは車やテレビにも使われ、経済もコンピュータなしでは成り立たない」「売り上げを伸ばしてこそ会社も豊かになり、給料も増える」といったみんなが知っていることを繰り返すだけになってしまう。これでは、論にも主張にもならない。つまり、イエス・ノーの判断にならない。

つまり、こういうことだ。何はともあれ、賛否両論のあるイエス・ノーの問題提起を作って、イエス・ノーを判断し、その根拠を述べる。そうすれば、小論文やレポートになるということだ。

■論理とはイエス・ノーを判断すること

このような私の指導に対して、これまで受験生や指導者からの賛成の声とともに、批判も寄せられてきた。批判のほとんどは、「小論文はイエス・ノーではない。○×で答えられないことを書くのが小論文であって、イエス・ノーにするべきではない。イエス・ノーでは高いレベルの文章は書けない」「物事はイエス・ノーでわりきることはできない。わりきれないことを、しっかりと考え、様々な思考を示すのが小論文の意味だ」というものだった。ついでなので、ここで少し釈明しておこう。

私は、「イエス・ノーではダメ」と語る人の多くはまず、小論文やレポートなど、意見を書く文章と作文の違いを十分に認識していないのではないかと考える。彼らは、小論文やレポートを、まさしく「文は人なり」というレベルで捉えているのだ。だから、個人的な体験を書き、しっかりと生活を見つめることを書くべきだと考える。そして、文章にこれまで生きてきた自分の信条をにじみ出させようとする。そのため、小論文はイエス・ノーといった明確な判断では書くことができないと考える。

私も、物事をわりきることはできないと考える。とりわけ、人の心、自然、経済など、わりきって捉えようとしても捉えきれない。世の中の多くのことが「一概には言えない。それを使う人と状況によって異なる」というのが、現実的にはもっとも正しい答えだ。「Aが正しいか、それとも反Aが正しいか」という問題の場合、ほとんどの現実的な対策としては、二つの案の中間案であったり、折衷案であったりするだろう。また今、そのような、すべてをわりきって考える近代ヨーロッパの思想が疑問に付されていることも十分に承知している。

だが、だからといって、物事をわりきることをせずに、カオスのままにしていては、いつま

でも物事を整理して捉えることができないのではあるまいか。物事をわりきるべきではないというのは、物事を分析的に捉えるべきではないと言うに等しい。分析的に捉えるということは、一つ一つの項目についてイエス・ノーを明確にし、その意味を明確にすることに始まる。イエス・ノーを明確にしないで、意味を明確にすることはできない。分析的に、つまりは知的に物事を考えることはできない。

要するに、考えるということは、イエスかノーかを明確にすることだ。そもそも、日本人はそうしたことを疎(おろそ)かにし、イエス・ノーを曖昧にし、分析をせず、情緒的な文章で満足してきた。そして、そのために「日本人はイエス・ノーがはっきりしない」「日本の政治家は自分の言葉で演説できない」「日本人は政策で動かず、人間関係で動く」「日本人は論理的でない」などと言われてきた。

だが、それでは、これからの国際社会において外国に太刀打ちできない。もっと分析する力や論理力を身につける必要がある。そのためには、情緒的作文ではなく、イエス・ノーを明確にした小論文を書く必要があるのだ。

いや、それだけではない。

確かに、現実的には「AとBの中間であるべきだ」「場合によって異なる」というのが正しいにしても、それでは論として、あまりに説得力がない。小論文やレポートというのは、ある

問題についての理念を答えるものだ。具体的にどうするべきかを明確にする前に、理念としてどちらであるべきか、これからどちらの方向に進むのが好ましいことなのか……などを判断することが求められている。そして、そうすることで、頭の良さをアピールするのが、小論文・レポートの意味なのだ。

小論文・レポートというのは、基本的に、ある問題を通して自分の知性と知識をアピールするゲームだと私は考えている。ありふれていない切り口で、物事を分析し、判断に説得力を持たせ、それによって能力を示すわけだ。そうすることで、入学や入社が認められ、上司に能力を認められる。ところが、中間案や折衷案、あるいは「場合による」という意見では、現実的には正しいとしても、あまりに論として弱い。

小論文やレポートとは、ある問題を通して、その背景にある大きな問題をえぐりだすものだ。大学入試の小論文の場合は、「日本社会の将来」「国際社会の進むべき方向」「民主主義の意味」「教育の意味」「生きる意味」など、社会科学的、人文科学的な大きな問題についての判断を示すものなのだ。志望学部によっては、「文学の意味とは何か」「英語教育の目的とは何か」「技術の将来はどうか」「日本人の食生活はどうあるべきか」などの場合もあるだろう。

企業で提出させられるレポートの場合も、直接的にはたとえば、新製品の開発についての意見書であっても、その背景に「自分たちの企業がどの方向に進むべきか」「これからどんな理

念で活動するべきか」「どんな社会貢献をしていくべきか」などという大きな問題がある。そうした問題に切り込むことで、分析力や知識をアピールできる。

フランスの大学入学資格試験（バカロレア）には小論文（ディセルタシオンと呼ばれる）が課されている。その答案は、毎年、専門の哲学者や学者も舌を巻く高レベルのものが含まれ、それらの文章は新聞などに発表される。いや、そもそもフランスという国に論理的分析的な文章が定着し、たくさんの思想家を生んできたのも、幼いころからディセルタシオンの訓練を受けているからだろう。

ところが、そのディセルタシオンの問題は原則としてすべて「イエスかノーか」を問う形式で行われている。フランスの哲学科の大学入学資格試験をはじめ、ほとんどの学科で課される論文がイエス・ノーの形式だ。たとえば、「小説は現実を映す鏡だというスタンダールの言葉は正しいか」「虚偽に含まれる真実などありえないというのは正しいか」といった具合だ。そして、デカルト、パスカル以降、ほとんどのフランスの哲学者、思想家たちの文章は、そうした論理の積み重ねからなっている。

これ一つとっても、「イエス・ノーでは優れた小論文やレポートは書けない」というのが大きな誤解であることは明らかだろう。

練習問題 1

では、まず、上手に問題提起する練習をする。次のようなテーマについての意見が求められた。どのような「イエス・ノー」の形の問題提起にするべきなのかを考えてみてほしい。

a 「学級崩壊」
b 「コンピュータと生活」
c 「新製品開発について」

解答例

a 「学級崩壊を解決できるか」「学級崩壊の原因は文部省のゆとり教育にあるか」「学級崩壊は学校に責任があるか」「学級崩壊は子どものわがままが原因か」など。

b 「コンピュータは生活を豊かにするか」「コンピュータは生活にとって必要か」「コンピュータによって生活を効率化するべきか」など。